慶應四年戊辰五月

内外新聞 第七

七日目毎ニ出版

知新館

不許翻刻

西垣文庫
文庫10
7348
7

特 文庫10
7348
7

帝国図書館蔵書

内外新聞第七

神戸新聞譯　洋暦第七月一日　皇暦五月十二日

去ル日曜日我五月九日或ル外國人等布引ノ滝ヘ行キ水ヲ試ミシニ其中ノ一人ハ游ヲ好マズ只水淄ニ入テ彼是セシニ水勢劇シクシテ誤テ深水ヘ溺レ込タリシニ漸々岩石ニ拝リ付大声ヲ揚テ助人ヲ乞ヘリ時ニ茶店ニ休息セシ友人等走リ来リ直ニ水中ヘ飛入リ棒縄等ヲ投テ以テ彼ノ溺シ人ヲ引上タリ

此溺人水中ニ於テ能ク注意セルナラバ斯ル過失ハ有マ

ジキモノナリ余等察スルニ此後ハ水ヲ嫌フナルベシ

○甚ダ愛憐深キ余等ノ支配人ハ今度兵庫大坂神戸ノ全権ヲ命ゼラレ國王ヨリ政テ印章ヲタヽハリシト余等此事ヲ聞テ太ダ喜悦ノ思ヒヲナセリ

大坂ヨリノ新聞

○前月廿三日我五月四日ノ夜十人計ノ強盗双刀ヲ帯ヒ居留所近辺ノ日本人家ヘ入リ金子二千両ヲ奪取リシト

○米國飛脚船コスタリカ名ノ来着ニ依テ前月三日マデノサンフランシスコノ記事ヲ得タリ

○日本軍艦富士山ハ今度大坂ヘ来レリ併シ持主ハ前日ニ違ヘリ破泊場所ハ當春南方ヲ襲ヒシ時破泊セシ処ナリ

第七月二日
我五月十三日

○米國飛脚船ノ着ニ依テ尤ノ重大事件ヲ聞得タリ」合衆國大統領シヨンソン名ハ勤務ノ過失アリテ放官サレシト是ニ依テ争端モ開ク可キヲイエムスタントン人名尽カシテ止ミタリト

大紗領後嗣ハ評議役ノ撰挙ニ依テゼ子ラル官スチヨ
ヒールド人名ニ決定セリ
共和政治社中ノ撰挙ハゼ子ラル官ガラント人名ヲ以テ大
紗領ニ充テコルフアックス人名ヲ以テ副紗領トセント欲ス
之ニ依テ来ル第七月四日ニ大會合アルベシ
大紗領ノ大任ニ充ラントヲ希望スル人々ハ裁判役総
督ニテチヤス人名兆ニセーモール人名等也此ノチヤス人名
ナル者ハ當時國中ニテノ有名ナル豪傑ナレハ或ハ
大権ノ帰ス可キヲ察セリ

右人撰ノ大會合アラバ恐クハ戦争ヲ開クベキ機會
ニ至ラントヲ思ヘリ
○頃日双カヲ帯タル日本人ポルトカル人ジヨゼフ一スカ
ラナ人名ノ酒店ヘ入リ酒ヲ与ヘンヲヲ乞シガ既ニ酩酊
ノ体ナレバ主人是ヲ肯ンセザリシニ頻リニ丐フニ依
テ一瓶ヲ与ヘケリ暫時ニ飲ミ終リ再ビ丐シカドモ
今ハ主人与ヘザリケレバ彼ノ日本人大ニ怒リカニ手ヲ
掛ケ巳ニ抜ントスルヲ見テ主人ジヨゼフ人名早クモ飛カ
ヽリ刀ヲ奪取リ大音ヲ挙テ加勢人ヲ呼立ケルニ幸ヒ

此時日本取締リノ役人通行ノ折ニシテ速ニソノ刀ヲ奪取リ此乱暴人ヲ捕ヘ行ケリ

時ニポルトガルコンシユルハ在留ナキニ依テ主人ジヨゼフヨリ米國コンシユルエ此由ヲ訴出タリ

米國コンシユルハ右ノ裁判ニ就テハ彼ノ日本人ニカヲ帯ルヿヲ禁ジ稼人トシテ永ク是ヲ使ヒ後チ生涯追放ス可キ旨ヲ或人ヽデ申出タリ後日此日本人相當ノ刑ニ處セラレバ余等悦ヲ其事ヲ記ス可シ

日本士官ハ公務ノ外ハ常ニ帯ル所ノ双刀ヲ脱却スルノ時節ヲ余等頻ニ待ナリ

○佛國全権公使リオンロチエス人名ハ轉任シテ本月廿六日我五月七日ゼオランド船名ナル砲艦ニテ當港ヘ着シ翌日ドプリークス船名軍艦ニテ大坂エ行キ仝日帰港セリ

同月廿九日我五月十日月曜日朝九字半時長崎出帆セリ此時港内ノ軍艦ハ尽ク祝砲ヲ発セリリオンロチエスノ日本ヲ去ルハ実ニ在留ノ佛人ニ於テ大ナル不幸ト云ベシ

来船

第六月廿九日ゼオラン船名横濱ヨリ同廿七日オーサカ船名同上

同　廿九日　キヤホガ船名　同上　同　廿日　オルカン船名　同上

第七月一日　コスタリカ船名　同上

去船

第六月廿九日　ソレライス船名　横濱エ　同　ゼオラン船名　長崎エ

同　オーサカ船名　長崎エ海エ　同　廿日　オルカン船名　横濱エ

同　廿日　テスパッチ船名　横濱エ　第七月二日　コスタリカ船名　上海エ

以上

大坂新聞

○五月廿日南本町二丁目八百屋町小八信濃屋之家ニ旅宿せし小田馬之助と云る士を石捕らんと抜見の強者ゆえ向ひ来ふ馬之助ハ疾逃去るに余輩二人を石捕ゆきしに元藝西四の々士て既ニ日比小田馬之助と云元藝西四の々士て侍守清士陵武隊と云隊長なりしが故あて手役を放さる事承知ようの隊中へ送るべき金穀拝を拒ニ遺恨を晴さんと せし由なり近頃ハ立流ゆ著し

家来に又人も石を引き妻をも抱へ乗馬を引かせ
強奪せし故盗賊なりとて捕手と風評されども
全く虚説なりとぞ
○過日より紀州田辺沖より東方の軍艦一二艘碇泊
世上との風聞あり大坂府より役人二名出張の
由巷説も色々あり拙ろ紀州の写し
とて手に入るまゝ左に記す
第四号十三日和歌山出張の大和小和二艘着
亦は昨十又日夕第大和着又百人乗組右崖

土砂後藩より報告より二大隊半り糸りは
様る見に川支りて山に田に逗留し嘆歎居
は大将の判変局に様子一番合点糸りふ下は
少及ばこれは内々に中紙で致下は
論者曰右の書面の信否は知らされとも多へ
なる姑く爰に載て報告の性なると待つ
○第四編に記せし短業師寅吉の始末を結する書
面を抜萃して左に挙ぐ
此夜八月十八日アメリカ国の名所サンフランシスコへ着し

奥行せしこと日く故障あるく初日より金玉の外亜人種々雑居を云掛さるる支那弟四家族八人は切なく上サンフラシスコより除せ亜サノゼ地名ようシゴトクトンに渡り夫よりサクラメントに渡りるる尚又人数減し其訳由を金玉より云うけしこと寅吉大こ立腹し厳密迫答に及とそれば金玉もサンフラシスコより除し亜し家族と山林医をべく或は猿地もて打つき拐と争論こなり神風楼の横濱の格女郎 接援もて同人及ひ以上四人は日本へ帰り玉余ハニウヨルクへ渡るべきよ赤族し十月六日桑港せし

よ私中にて又繁勃よ及ぶ弟四家族依て元の旅宿へ戻り横濱住人八百屋唐物屋名の扱ひもて俄発文を立て渤和蘭し同十六日以の私よ桑十二月三日子方とを女子の名私中に死を同七日ニウヨルクへ着し正月元日より真沙せしよ二日三日以分寅吉発病して同十六日終に病死を是より金玉の外亜人名換金の奪として子殺乃者を彼方に残るべき由を云掛或は荷物を残るべしと種々の事起りて家族の男女難儀に及ぶる由こ

或人弟に編を見き雑じて日寅吉は元京師二条新地

荒稲荷とゆふる侍こ小家を建合の是よ住居して親を
大者と云共ふ古町誓願寺の境内そ手妻軽業を
なし見物の人よ一銭二銭と乞ふる至て下賤の者ゆ
天保の末軽業師山本小鶴が孔桔梗り竹沢義次の増
多猿楽者を真似て右夫早竹寅吉と号し所々於て
軽業と奥行を独見物を知りしる人ハ寅吉が
右夫と称し哥舞妓役者の如く自ら誇大なるを悪
むものも多くて
多新耳紙の名をかんをを憂ふと

編者曰拙り我業の思ふ所ハ又違へり彼ら洋行
の始終を記して外国人の情態をも察知をべく
己未三思を加へ考して漫ら外国、渡り過ぎ患難
を度成し甚変よ至ハ内外国ゆも関係をふ小
及ぶ事ごさふ衆と注をるよ至寅吉元下賤の者
とゆへども藝を以て教人の抹梁と成るも又ま至こ
於ハ一己の豪傑なり功名ハ君子の欲ぜざる所盈呉
い天地の定理寅吉名利の二ツを欲して外国の鬼と
なるゆ是又一ツの教戒なるべし

○五月十六日横濱を出帆して大坂に着せりと云
人の結ひ日遠月十又日夜夷の刻江戸表市中上野
辺より火の手上り亀岩様に出火こハ年〻兵火
と中風少せりと云

京都新聞

○小松帯刀丹羽淺次郎大村益次郎小原仁兵衛土肥
謙蔵山田市兵衛陸原恭右衛新田三郎本村三郎
松平洋〻助後田左馬助土方大一郎織田内小笠原控六
長新平長田控次郎小川荒〻助右衛〻佐方吏〻

江戸府の職掌を作付追〻仕東下〻れ成由
○富岡浅高の旅行〻
植木店廣店建営〻付聊志を傾〻
きて後〻又店廣く傾く生る弱
きこと甚〻ハ君〻仕へ〻天津日此
光りて〻〻〻奴つさ〻〻〻
り此〻夫の所を法〻せ〻世〻
ち〻せ乃後〻ハ〻〻〻ら〻
国四月廿日出信及ひ岩光寺五分〻出快申〻云

○甲府の方も又〻紙使寄り集い報おせ人付此二十四日松代より兵隊二小隊大砲二門同令砲手を加附属百三百人程出張五〻出日〻八方より兵隊通行何と申〻騒〻敷浮ろ〻と日を暮しい今年松代侯が京都甲州戦後手弁諸所出張い駿河守こ付費用も又不少ゆえと兵糧い信濃路い松代侯を一ト力こ致し只管下民こ至りいる之神の如くこ戴い榜子五〻い松代兵隊通行を見れば古民共往来こ平伏手を合せ拜こ居中い実ゆ下情を得又

終〻困弊こ心を用ゆ〻〻と云〻

関東の風聞

○閏四月十九日江戸常盤橋内越前兵衛こ陸左陣営倉敷地兵隊百人清水内湯殿の人数凡一大隊半り横浜い繰出しこ相成同所より急飛脚ゆ羽田庄内い発向ゆ〻と云〻

右行軍中こ薩藩〻士四人土藩二人加りんい陸軍ふんと云院隊の内二小隊半り大院護衛〻短院を携〻〻家いふ弥士院元四院を携〻大院三挺

内武挺いと別ざる大炮元巴三斤位の長サカノン砲一門い
四斤絶條砲玉茶荷とおりゝ二人持ち弱り荷大元
八九十斤長持揚ち長荷三口人持口又十とゝゝい由
○同廿二日彼林氏左城ち安岩倉殿大名小弥四
郎氏古着氏守清い四郎藩加納藩ち横手羅長
大垣表根の兵隊い彼林氏跡しの由
○同日夕方上総大田表ニ氏左隊の柳原殿氏政府
表根郎氏氏入ち組同夜表ち弁氏右隊営氏西小
ち方ち何者の不為ちや大砲三發打巴ち知幸にして

破裂せざゝ玉い長猟弾にて焼玉とゝゝゝ由氏古清
の演松勢ちゝ時探索せちゝ出しゝちゝも終と曲者を
見当めさる由ちの砲声由紀坂辺を出へしと
○越前郎古左隊ち高倉殿四条殿明廿口日横浜
古蒸途日所ち廿八日亜墨利加の蒸気船ち乗込ち越後宮田
郎今郎氏古乗出しゝ氏多合ち由
○安房上下総召常陸ち口ヶ玉先ツ弦静の横手て
土浦藩い勤王との風評ち
○柳原殿最初彼金氏古着城外学校て三日氏立

陳大田藩に出進軍 大田藩を撃い彼金藩に出張
陣屋ハ本家なる吉田侯の家臣に出張とぞ

下総西張静の始末

○四月廿三日下総玉流山屯集の彰義隊江戸より
と千住迄ハ押来る由ハ彼薩勢佐土原勢出張の
彰義隊押来る模子なり
同廿四日 松戸駅より彰義隊府せんとする由故来る
両藩の兵隊新宿〳〵方へ陣を張を一隊の彰義松戸と
取きり列強判〳〵上兵器を官軍〳〵交互彼京勢右

これを護る為る又一隊の彰義松戸の間ハ
掛望なるを彼土原藩引返してこれを止ノ此彰義
も伏従せしめ薩勢の兵と共に格護し兵扶る所乃
兵器ハ 大総督府、是出し翌廿五日應援の薩兵
ハ江戸、到る同廿六日廿七の彰義ハ因安ノ寺、引後
しとお成東小の彰義隊張静を
閏四月朔日 木更津ハ屯集の彰義隊押来る廿ハ
須市藩彼隊出張なり彰ハ松戸駅に屯を佐土原藩
應援として松戸ハ八幡に移る彰義ハ行衛の者を遠ち

鎧も兵器い渡さとすべしと云慕ふ依て落着ふ為

同二日藤懸を結の殿判と称八幡に於て彼方勢具塚村い

義堂智行徳に於て龍華勢孫が谷に於て佐古原勢と手分を

定めて城の宿陣私構仕寄せこれ成し由

同三日未明八幡後藤子具塚義堂手に城後ふ立て押

寄戦争と成孫ヶ谷辺にて佐古原と合戦を始む

是が二方の戦ひ官軍先鋒苦戦なり此日佐古原

勢奮戦して私構宿く押寄せ同所に放火し城兵を

追拂ひ遂に薩兵二小隊援として愛に到ると云

同四日御津両家の兵抱見川を出張

同五日佐倉に進軍し私構彼方の城後木更津に里

谷辺に陣を張る由なり

同六日千葉宿に進軍せり此日先日よりの戦城勢強

大くなるを依て副総督吉田出馬し私先鋒薩兵義

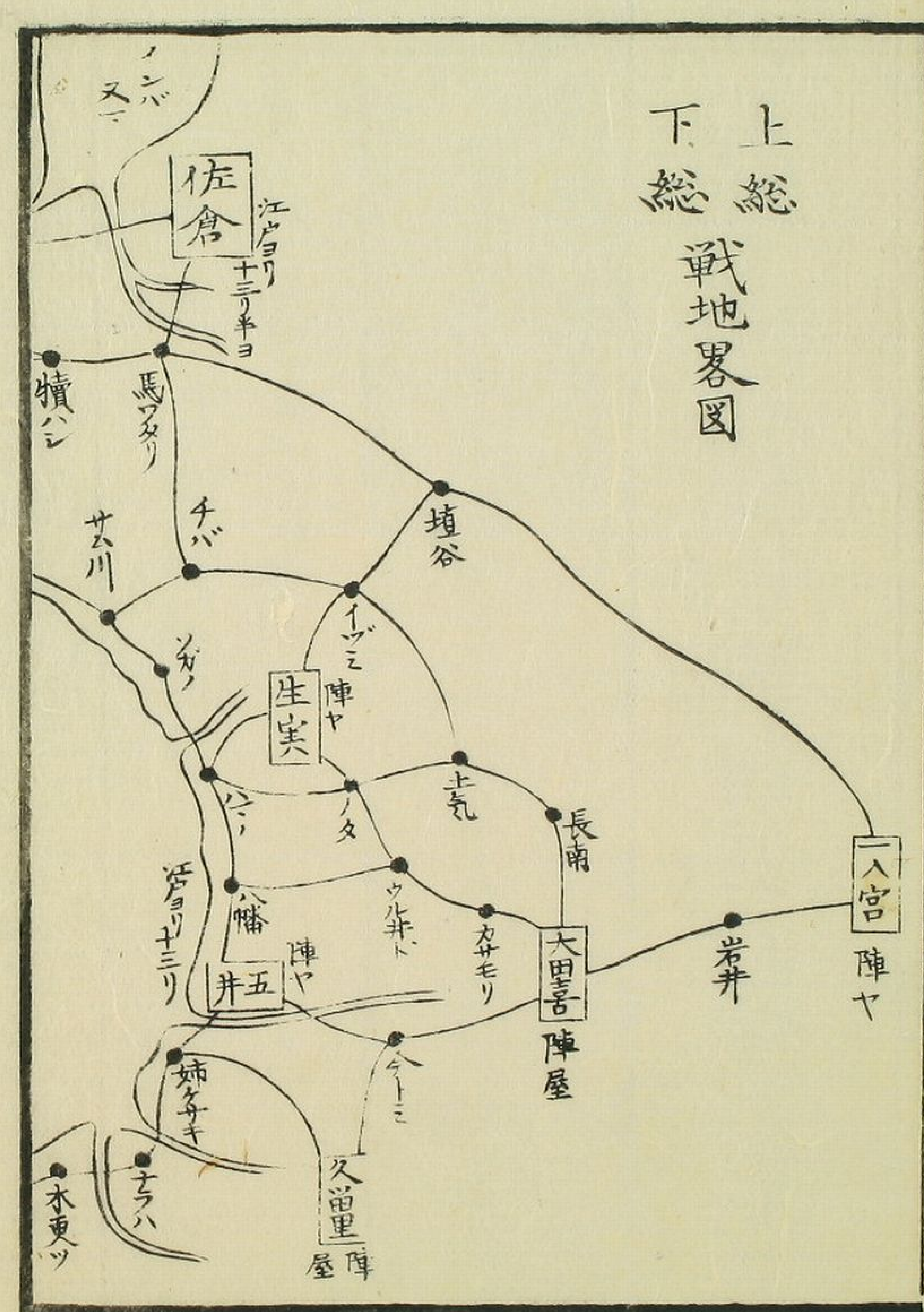
大村藩の来合を

同七日城軍上総玉八幡辺へ押出し又井門を要害とし

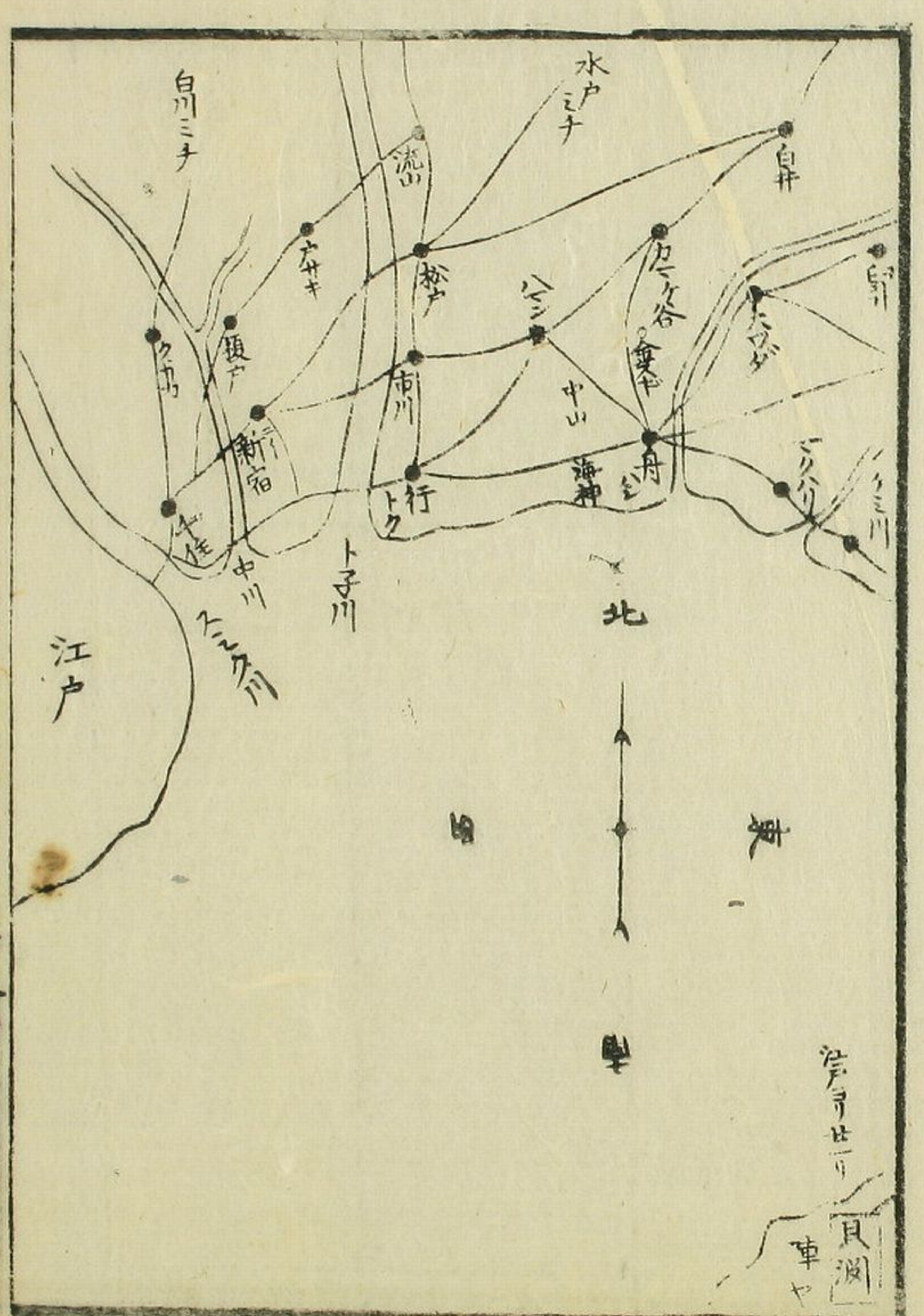
て防戦を城又級を出せり官軍婦ヶ崎辺追討又井の

陣屋を奪ふ

上総下総戦地畧図



佐倉
江戸ヨリ十三リ半ヨ
馬ワタリ
チバ
サム川
埴谷
イヅミ
生実
陣ヤ
上気
長南
一ノ宮
陣ヤ
岩井
大田喜
陣屋
カサモリ
八幡
五井
陣ヤ
江戸ヨリ十三リ
久留里
陣屋
木更ツ



白川ミチ
水戸ミチ
臼井
流山
松戸
市川
行トク
海神
中山
千住
新宿
中川
江戸
北
東
南
西
江戸ヨリ廿一リ
陣ヤ

同八日官軍本更津ヨリ里谷ニ押寄ル賊ハ早くも海陸ヨリ逃去ル一ト先鋒静ヨ及ベリと雖

同十日より官軍退ク江戸表ニ凱陣となりたる由

説ニ曰上総下総ハ丑ノ佐幕の小藩多ケレハ此戦ハ紋ヲ定セ〳〵賊徒多貝湖辺より東北ニ相及ヒ鶴溪ニ上陸し支より甲府ニ横行せしなり

なりくんと雖ども詳説と聞得なし第八編ニ布告ス〳〵

知新館告文

此社中ニ於テハ珍奇花ニ諸相庭物等ヲ記スノ本意ナリ又館外ノ人タリトモ功能アル事ヲ衆人ニ示サンカ或ハ書籍等ヲ彫刻セント欲セラルヽ者ハ此社中ヘ御示談アラハ速カニ廣ク海内ニ布告スベキ者ナリ

浪華

知新館

大坂心斎橋本町北入　河内屋忠七

同　北久太郎町四丁メ　河内屋清七

京都四条河原町西入　山城屋勘助

弘通所

大坂心齋橋北久太郎町亞　河内屋　喜兵衛
同　仝筋安土町　河内屋　和助
同　北久太郎町四丁目　河内屋　新次郎
京都三条御幸町角　吉野屋　仁兵衛
同　御幸町姉小路上ル　菱屋　孫兵衛
同　三条寺町西入　吉野屋　甚助
同　富小路四条上ル　丁子屋　榮助
同　寺町姉小路上ル　錢屋　惣四郎